

松永澄夫著「言葉の歎び・哀しみ」東信堂 2011年3月15日刊を読む

## 言葉の歎び・哀しみ

1. (1) 言ったその瞬間に「しまった」と思うことがある。
  - (2) かと思うと、「こう言えばよかったのに、なぜ黙っていたのだろう」と悔やむこともある。
  - (3) 人はいろいろなことで後悔するが、言う、言わないで後悔することは非常に多い。
  - (4) これらの後悔はもちろん、言葉は誰か聞く人がいるところで喋るものだとすることを前提にしている。
  - (5) (聞く人は、人が話しかけた相手とは限らない。
  - (6) 声は音として四方八方に届くのであるから。)
  - (7) 言葉は人に作用する。
  - (8) 言う、言わない、どのように言う、どういう言葉を使うか、そこにみられる違い、しばしば僅かの違いが、少なくともその瞬間の人間関係に、極めて大事なものである人間関係にすぐに影響を及ぼす。
  - (9) しかも、言葉はいとも簡単に口から飛び出るから、それを追っかけて「しまった」という気づきが生まれる割合も高くなる。
  - (10) 確かに、言うのに躊躇い<sup>ためら</sup>があったり、エネルギーを要したりして、言葉を使うことも大変な場合がある。だから言いそびれもするし、あのとき言えばよかったのに、という後悔も出てくる。
  - (11) けれどもこのときでも、言葉を使うことは他の行動等と比べれば簡単なことなのに、という前提があつての後悔であろう。
  - (12) 言葉に必要なエネルギーは心理的負担に関わるものでしかなかった。
  - (13) ( <sup>ひるがえ</sup>翻って行動というのは、言葉を使うことよりは、計画性をもつ傾向が強い。
  - (14) 「そこで、衝動的行動の場合は事情が違うが、行動がどういう結果を招こうと、行動が後悔の種になることから免れる<sup>まぬが</sup>場合は言葉の場合よりは多いであろう。
  - (15) 熟慮の上の行動<sup>なおさら</sup>だったら尚更である。)
2. (1) 言葉はすぐに、かつ人に作用する。
  - (2) 確かに、たとえば殴るという行動もすぐさま人に重大な結果をもたらす。けれども、殴るような行動は人は滅多にしないものである。

- (3) 人の傷の手当てをするとかの場合は別として、私たちが日常生活で人に対して何かをするときは、(物理的な力によってではなく)意味の力を經由してなすのである。
- (4) その最も単純な形態は、笑いかけるとか怪訝<sup>けげん</sup>そうな目で見るとかのさまざまな表情で相手に接することである。
- (5) それから、手を振ったり人を押しとどめるような仕草による場合もあるし、食べ物を分け与えたり重い荷物を持ってあげるなどのサービスをしたり等でも人に作用を及ぼす。
- (6) けれども、圧倒的に多いのは言葉を言うことで人に働きかけることである。
- (7) (手を振る仕草も、「さようなら」とかの言葉を言いながらするようなことの繰り返しの後でなければ、相手にはっきりした意味作用をなさないであろう。
- (8) その仕草をしない場合とは何か違っているという、それだけの思いは生じさせるかも知れないが。)
- (9) それから、契約することで相手に何かをしてもらう等のときも、制度の力の媒介等を考慮すべきだが、やはり言葉は不可欠である。
- (10) なお、自分から出た意味作用についての後悔として、なぜあのとき自分は仏頂面<sup>ぶつちようづら</sup>をしていたのだろう、もっと愛想良くしてもよかったはずなのに、というような後悔もあるが、これよりは言葉に関する後悔の方が多いたのは、表情は出てしまう、コントロールが難しいから諦めもつくが、それに対して言葉の方は本来は自分次第なのに、拙<sup>まず</sup>かった、という気持ちが働くからではないのか。

3. (1) さて、言葉は人の世界で作用する。

(2) 効果をもつ。人では意味が力をもつからである。

(3) ところで、その意味はしばしば感情と結びついている。

(4) どうしてだろうか。

(5) 私たちは言葉の意味を理解しながら、意味が分泌する価値の微妙な有りようを感受するからである。

(6) いわゆる差別語の使用の場合などではこのことが鋭敏な問題を引き起こすが、何もそのような特殊な場合ではなくても、日常の普通の会話、たとえば、「仕事、頑張ってるようだね」「お洒落<sup>しゃれ</sup>な服ね」「間抜けだな」「相変わらずボロ家に住んでいるの?」とかの言葉を考えても、ほとんどいつものこの感受が働くということの納得がゆく。

(7) 意味が力をもつことの中には、まさにこの感受を生成させるそのことがあるのである。

P4 ~ 6

[コメント]

私の尊敬する哲学者、松永澄夫先生による「言葉の歓び・哀しみ」についての論考。言葉のもつ力は人間関係に対してさまざまな影響をもつ。この文章の後には、具体的な事例研究がつづく。是非、御一読を。

— 2012年10月3日 林 明夫記 —